

富山発「補修オリンピック」が始動

道路橋の最適工法選定へ試験施工

SIP、メーカーと連携

高度経済成長期に造られた道路橋の維持管理の合理化が喫緊の課題となる中、富山市発の通称「補修オリンピック」が始動した。

富山市と北陸SIP、構造物補修メーカーらが連携し、道路橋の最適な工法や材料を選定するため、市が実橋（フィールド）を提供。試験施工を行うことで、北陸地方の市町村に適した補修工法を構築し、発信するのを目指した。

15日に市役所で開かれた会議には、SIPから金沢工業大学の富里心一教授、富山県立大学の伊藤始教授と内田慎哉准教授、石川高専の津田誠准教授、金沢大学の深田幸



試験施工に向けて意思統一を図った会議＝富山市役所

史教授、富山市の植野芳彦建設技術統括監、橋りよう保全対策計画係の杉谷真司係長と宇津徳浩主査、試験施工の協力企業として、大同塗料、サセメント、タイフレック

ス、アエロス・ジャパンの担当者が出席。冒頭、植野統括監が「道路橋の補修技術は色々あるが、明確な評価制度がない。富山市の老朽化した橋を使い、施工性や耐久性などを確認し、今後の評価にしていきたい」とあいさつ。

富里教授は、「市町村の短支間の道路橋では塩害ではなく、かぶり剥落した上部工コンクリートが散在している。各自体による近接目視点検査は終了したが、措置が進まないのが現状」と述べた上で、「市町村に合った補修工法を選定するため、今年度中に鉄筋コンクリート橋における上部工コンクリートの剥落、橋台のひび割れを補修するトライアルを、協力企業の施工で実施したい」と趣旨を説明した。

その後、富山市が上部工、下部工それぞれの試験施工の候補となる橋梁のリストを提示。各社が

が少なく、大型車も通行しない場合、高度な補修工法を選定すればよいかを採り、来年度以降に本格的な試験施工に移れば」と話している。

建設工業新聞掲載